



「死んで終わり？」

理事長 バジル 八代 智

ほとんどの皆さんはお盆やお彼岸に、ご家族とお墓参りに行かれたことがあるでしょう。日本ではセミの鳴く真夏の暑い日にお盆を迎えますが、キリスト教では毎年11月1日の諸聖徒日(All Saints' Day)と2日の諸魂日(All Souls' day)にお盆と同様、逝去者のために祈る日が設けられています。皆さんもよくご存知のハロウィーンは、これらキリスト教のお盆の前夜祭と言えるでしょう。

教会やキリスト教系の学校では、この節に関係逝去者のために祈ります。この世に生きる私たちは「死」というものを経験したことがないだけに、いずれはそれを迎えなくてはならないという大きな不安を誰もが心の中で抱えていることでしょう。けれどもそれ以上に死は、愛する人をこの世から亡くすという大きな悲しみをもたらすがゆえに、私たちは死というものを忌み嫌います。愛する人の在りし日の思い出が楽しく生きいきと光り輝くものであればなおのこと、別れを余儀なくさせる死というものを容易に受け入れることはできません。

古来よりここ日本ではこうした理由から徹底的に死というものを忌み嫌い、どうにかしてそれを遠ざけようとして参りました。お葬式の後に塩をかける習慣は、その典型と言えるでしょう。しかしながらいくら死というものを遠ざけようとしても、人は自分の力で死に対する不安や恐怖心や悲しみというものを克服することはできません。こうした日本古来の死生観に対して、キリスト教の死生観はもっとシンプルです。それは神様の大きな大きな命に帰るといふか、戻るといふか、神様の大きな命に包まれること。これがキリスト教の死後の世界です。この世の憂いや苦しみやしがらみから開放されて、平安この上ない神様の命に抱かれて眠り続ける状態です(聖徒の交わり)。それゆえキリスト教の死生観は、日本的な不安と恐怖に満ちた死とは明らかに違う、よりアグレッシブな捉え方と言えるでしょう。死を忌み嫌うというよりむしろ死後の世界においてこそ、この世的なあらゆるものから開放されて限りあるものではなく限りないもの、目に見えるものではなく目に見えないもの、そしてやがて朽ち果てるものではなく永遠に変わらない命へと変えられるのです。

こうしたキリスト教のもつ彼岸的な信仰に対して異議を唱え、この世で成功してこそ人生の価値があるんだと、徹底的に現実社会の中で理想を追求しようとした人たちが数多く排出されました。トーマスマアをはじめジャンジャックルソー、フォイエルバッハ、ショーペンハウアー、マルクス、ニーチェ、サルトル、ボルテール等々、16世紀以降、神様や天国といった彼岸的な信仰ではなく、人間の英知と理性が万能であることを信じて追い求め続けた人々が世界中で登場しました。

しかしながら人間というものは愛する人を失ってハイ死んでおしまいと言っているのけるほど、強くできてはおりません。愛する人と死別してもなお、どこかでその人が、またその人の魂が永続することを願うのです。そしてまたいつか必ず会いましょうと心に誓い、この世にあってその悲しみから徐々に癒されてゆく、それが本来の人間誰もがもつ根源的な優しい死生観ではないでしょうか。

こうした彼岸的な信仰をあえて拒絶して、人間社会の只中で勝利を得ようとしたのが先ほどの彼らです。とくにボルテールは「あと50年もしたら聖書を読む人間なんて地球上からいなくなるであろう」と、世界をビックリさせる大胆な予言をいたしました。しかしながら晩年は「もう無神論者の看護なんてまっぴらごめんよ!」と最後を看取った看護士に言われるほど、自らの死に対しては狼狽しきったようです。また「ツアラトウストラはかく語りき」という無神論者のバイブルとまで言われた著書の中で「キリスト教の神は死んだ!」と、これまた世界中を驚かせる発言をしたニーチェもまた晩年は痩せ衰えてゆく自らを省みて、半狂乱のうちに死んでゆきました。

このようにいかに強靱な精神力をもった哲学者であっても、死後もなお自分や最愛の人の存在を可能たらしめる彼岸的な信仰なくしては、迫りくる死の恐怖に自分だけの力で立ち向かうことはできないのです。「あと50年もしたら聖書を読む人間なんて地球上からいなくなるであろう」とのボルテールの予言から200年以上経ち、現在聖書は世界中で2479言語に翻訳され、3880億冊以上発行されているそうです(ギネス記録断トツ1位!)。また「キリスト教の神は死んだ!」とのニーチェの発言から100年以上経ち、現在クリスチャン人口は20億とも25億とも言われています。日本ではまだまだマイナーなキリスト教ですが、それでもその彼岸的な信仰を世界で3人に1人は真実のものとして受け入れているのです。なぜなら「死んで終わり」ではなく死後の世界においてこそ、この世のあらゆるしがらみから解放された神様と共にある至福の状態を約束されているとの強い信仰、確かな希望があるからです。

キリスト教だけでなく、仏教やイスラム教やヒンドゥー教でも構いません。自分を可愛がってくれてすでに眠りについたおじいちゃんやおばあちゃんの墓前で祈る時、人は「また会おうね!」と優しい気持ちになれます。この私の命を誕生させてくれた両親、そのまた両親すなわち祖父母と、10代遡れば1024人のご先祖様がいます。20代遡れば1048576人、30代で何と日本の人口に近い1073741824人となり、36代で68億人となるのです。こうした命の連鎖のおかげで今の自分がこの世に存在していることに心から感謝して、これからも自分自身の命に誇りを持って、与えられた今日一日を大切に過ごしたいものですね。